

# 家族に心配されながらも 最後まで搜索を諦めなかった

福島県南相馬市消防団  
小高区団 副団長

片岡 芳廣 (59歳)  
消防団歴 27年 (会社役員)



## 南相馬市の概要と被害状況

南相馬市は福島県の太平洋側に位置し、平成18年1月1日、原町市と相馬郡小高町および鹿島町が合併して誕生した市である。行政区の小高区はその南相馬の南側に位置し、面積は91.95km<sup>2</sup>、人口1万2,163人（平成23年6月1日現在）で、阿武隈高地を町の西端とし、小高川が町を横切り太平洋へと流れている地域である。また、小高川の中流部には小高城址などがあり、周辺に区役所や駅、2つの実業高校などが集中する。

南相馬市消防団は小高区団（3分団26部）、鹿島区団（4分団28部+機動部2部）、原町区団（5分団36部+自動車部2部）、の3区分団に分かれていて、総勢1,334名が所属している。被雇用者（サラリーマン）は1,078名（約80%）と多い（平成23年4月1日現在）。

南相馬市は、東日本大震災により、死者631人、行方不明者7人、負傷者59人の人的被害、全壊5,432棟、半壊1,306棟、一部損壊2,232棟、床上浸水991棟、床下浸水308棟の住家被害に遭った。

## 振り子のように揺れる家

今もまだ福島第一原子力発電所の事故で苦しむ南相馬市。なかでも小高区全体は今も警戒区域に

指定され、全員が避難をしている。私はその小高区の消防団で副団長を務めている。

3月11日発災当時、私は海からすぐ近くの浪江町塩棚で、ある家の住宅設備工事を従業員たちと行っている最中だった。14時46分、大きな揺れが東日本を襲い、福島県にも震度6弱の地震が起こった。一瞬頭をよぎったのは2日前に起こった大きな地震だった。「また地震が来たんだ」と思い、一時作業を中断し揺れがおさまるのを待とうとした。しかし、普段の揺れなら5、6秒、長くても10秒ぐらいでおさまる揺れが一向におさまらず、1分が過ぎたところで立ち合っていた建て主さんと「これは、やばい！」「ここに居られる状況ではない」と判断し、2人で外に出ようとした。しかし、思いのほか揺れは激しく、2人が外に出ようとするのを阻むかのように容赦ない揺れが襲った。建て主さんと四つんばいになりながら、やっとのことで外に出た。外に出てからも瓦の落下に注意しながら激しく揺れる植木につかまり揺れがおさまるのを待った。周りの様子を見まわすと、周りの家の2階が振り子のように揺れ、道には瓦も降ってきていた。長い揺れがおさまると同時に、周りにあった2、3軒の家がまるで振り子のセットのようにバタ…バタっと次々と倒れ始めた。目の前に起こっていることが信じられずにいたが、消防団という職務柄、私はすかさず倒れた母屋に向かった。「だれかいなすか？」「いなすか？」と2、3軒の家を走り回り、声をかけ、家

の瓦礫の隙間から安否確認を行った。幸いお年寄りたちもみな大きな揺れにビックリし、外に飛び出していたため、そこでの犠牲者はいなかった。この時、南端の小高区と北端の鹿島区で、震度6弱の揺れが観測されていた。

作業をしていた家に戻ると、建て主さんが「これは津波が来るかもわかんない」と言ったが、この地域ではかつて大きな津波の災害はなかったため、せいぜい大きくても2、3mの津波で防波堤で止まるだろうと、思っていた。しかし建て主の方に再度「これはすぐ津波が来るかも知れないから片岡さんもすぐ退避したほうがいいよ」と言われ、残った仕事を片付け、15時過ぎに従業員と一緒にその場を撤収し、会社に戻ることにした。

### 迂回に迂回を重ねて会社に戻る

会社は小高区の福岡行政区で、作業をしていた現場からは車で20分くらいの所だった。街道を北上し帰る道すがら、ひび割れた道路状況を見てこれは尋常ではないと思った。ことの重大さに、他の現場の作業員にもすぐ撤収するように電話を入れたが、すでに電話は通じなくなっており、連絡の付けようもなかった。しばらく車を走らせていると配水場の所に警察官が2人立っていて「井田川の配水場に向かう道路が50cm下がっていて通行止めになっているため別のルートを行ってください」と言われた。やむを得ず、コースを変えて帰社することにした。ところが、各道路の舗装状態も地割れなどでかなりの段差ができていて車が思うように通れなく、迂回に迂回を重ね通常20分で行ける距離が相当な時間がかかった。ようやく戻ったのが15時30分過ぎだった。

### 津波から逃れ高台へ避難

やっとの思いで会社に戻り家の様子を確認していると、1台の消防自動車が「津波だ！すぐ逃げ



津波で被害にあった事務所

ろ！」と広報をしながら猛スピードで飛ばし目の前を通過して行った。自分でも一瞬「なに？」とその言葉に呆気に取られていたが、目を海のほうに向けると津波がすでに国道を越え会社の目の前まで来ていた！「これはいけない」と思い、先に家族を車に乗り込ませ急いで退避させた。そうこうしている間に津波は瓦礫と共に会社の10m手前まで来ていたため、自分も急いで高台に車で避難した。工場のある高台へ避難し、2波3波と来襲する津波がおさまるのを待ち続けた。その状況をなすすべもなく見守った。津波が、南相馬市の海岸線から約2km付近までの町を呑み込んだ。小高区塚原字沼在住の自然環境調査員の見聞証言によれば、特に津波の第3波は大きく、海岸線に設けられた高さ十数mの防潮林を越えたという。

津波がおさまったのを確認した私は、自転車を借り、避難していた高台から自分の会社に行ってみることにしたが、農道の半分まで来ると、海水は膝まで水没しているため自転車を使うことは出来ず、小高い所を探しながら徒歩で会社に戻った。会社はすでに1階のガレージ部分が破損され、従業員の車も流されており、この津波が尋常ではないことに私は茫然とした。会社に戻る道すがら偶然にも小高福岡行政区を管轄している東部地区の第3分団長と行きあい、すぐに区役所に行こうということになったが、行く前にこの状況を把握しようということになった。辺りはすっかり日が落ちていて薄暗くなっていた。

### 救助、捜索は夜通しで行われた

国道6号は大分水が引けていたため、私は第3

分団長とともに国道6号を北上し区役所に向かった。状況確認をしながら車を走らせたが、辺りは予想だにしない瓦礫の山が散乱し、言葉にならない状態だった。18時に区役所に到着した。区役所では災害対策本部が立ち上がり、打ち合わせがすでに始まっていた。自分も対策本部に入り、消防団の救助活動についての救助マップなどを作成し、消防団幹部で作戦をたてた。

辺りが暗くなってきたため、一人ひとりで探すのは困難とし、10名1組のグループで行動をすることにした。通信網が多少復旧し、区役所には救助を求める市民からの電話が入るようになった。消防団は救助要請が入った所を優先的に分隊で動き救助に向かった。水位は多少引いていたものの、海水で孤立したところが多く出たため、ゴムボートなどの用具が必要となった。消防団の備品にゴムボートはなかったが、団員が個人で所持しているゴムボートを使用した。暗い水のなかへとボートを曳き、懐中電灯で照らしながら進むため、瓦礫の破片や釘が剥き出しになっており、活動はかなりの危険が予測された。私は安全第一で務めるように団員たちに強く指示した。

捜索は夜通しで行われた。暗闇のなか、車のなかで人の気配はすれどもそこまで行くすべがなく、助けたくても助けられないジレンマがあった。今回の救助では、今までの訓練でありえなかった想定外の予測不能なことばかりが起こった。要救助者はご老人や身体の不自由な方が多く、救助活動は困難を極めた。情報も錯綜していたため、負傷者がどのくらいいるのかなど、把握するのに時間がかかった。こうして、救助活動は夜が明けるまで続いた。時間が経つにつれ、連絡が取れるようになると、召集をかけることが出来るようになり、徐々に消防団員の人数が増えていった。

## 原発が爆発したらしい

翌朝12日8時。この頃は誰も、福島第一原子力発電所の事故のことは頭になかった。人数も増え

てきた小高区の消防団は、この朝も1班から13班に分かれ各チームに分かれて捜索を行った。救助に加え遺体搬送の作業も入り、団員の負担も増えた。自分も捜索本部の一角で、団長や副団長、警察の方と捜索の作戦を練っていた。そして…その情報は警察無線より突然入ってきた。一緒に打ち合わせしていた警察官が「原発が爆発したらしい」と小声で言った。誰もが一瞬にして止まり「え？ なに?!」と振り向いた。

「原発が爆発した」という情報に、警察官も消防団幹部も「消防団の捜索隊も一時退避したほうがいい」となり、外で捜索している団員や隊員に、すぐさま「一時捜索をやめて車に待避せよ」と無線で連絡をし、30分程度車内に待機させた。その後、なんとそれは「誤報」という修正情報が入って来たのだった。が…それこそが誤報であり、実際には、原子力発電所で水素爆発が起っていたのだった。あの時、現場はかなりの情報が錯綜し混乱をきたしていた。昨晚からの夜通しの活動ということもあり、消防団の疲労も考慮したうえで、12日は15時くらいに捜索が打ち切られた。

同日の夕方、原子力発電所で原発事故が起っていることが明らかになり、区役所に緊急対策室が設けられた。緊急対策本部では、原子力発電所の事故を受け、明日からの捜索をどうするかが話し合われた。第一に上がったのは「原発事故を踏まえ、20km圏以内で活動する消防団の放射能対策はどうか」ということだった。消防団の装備としても防護服が2、3着という少ない数で、マスクだけで対応せざるを得ないのが現状だった。18時25分には原子力発電所から半径20km圏内の住民には避難指示が出され、小高区もその圏内に入っていた。消防団の捜索も困難を極め、住民から「遺体がある」と通報があっても屋内退避や避難指示が出ている地域で、マスクだけでは対応するのは危険を伴うため団長も「いけ」と指示を出せずに悩んでいた。しかし、私たちは各自で判断し有志という形で動くことを決意した。他の団員には強制せず、自ら防護服を身にまとい、捜索を続けた。原子力発電所で働いている団員もいたた



め、放射線の知識に関するレクチャーも受けた。

## 搜索の断念と無念…そして再開

小高区では12日に避難指示が発令された。13日には消防団のローラー作戦による「避難指示」の広報活動が行われた。この地域の住民の方々には原子力発電所について非常にナーバスになっており、広報活動、誘導活動は早期にスムーズに行われた。大部分の区民は、市が用意したバスで18日から20日にかけて集団避難をした。有志で搜索に当たっていた消防団も、家族の意見もあり避難せざるを得なくなった。14日午前中に、小高区は事実上地域全域の閉鎖となった。

消防団の事務局は原町区に移したが、搜索は一時休止となってしまった。14日以降、小高区の消防団は避難所で、避難民への食事の準備などに従事した。私の家族も会津へと避難したが、私は南相馬に残り、消防団の活動を継続した。来る日も来る日も避難所でお世話をした。消防団も精神的疲労が積み重なってきていた。

そんな中、福島第一原子力発電所で3回目の爆発が起こったと情報が流れてきた。当時を振り返ると、「さすがにもうこれで駄目だ」と思い、あの時は疲労と重なり、本当に心が折れた。その爆発をきっかけに、残っていた団員と話し合い、活動を一時休止しようということになり、有志の消防団員たちも一旦それぞれの避難所に戻った。

4月8日、小高区に朗報がもたらされた。原子力発電所は不安定ながらも落ち着きだしたため、再び救助・搜索活動が再開できるとの話であった。消防団を徐々に招集し始め、最初の頃は私を含め3名だった。防護服を着て積載車で瓦礫のなかを搜索し、小高区の建設業者に頼み、大きな瓦礫などを重機で取り除きながら、遺体搜索にあたった。時間が経ち過ぎてしまった遺体は、色が変わっているため、瓦礫と間違わないように搜索するのに苦労した。まだ海水が深々と残る地域にはなかなか入れず手つかずだったが、排水ポンプ車



防護服を着て活動を再開

などを導入し、排水しながらの搜索を行った。

家族に心配されながらも、職務をまっとうすべく、最後まで小高区の搜索を諦めなかった。南相馬市では消防団の設備もしっかりしていた。救助活動は、これらの設備があってこそ発揮できる。消防団の活動は危険を伴うと思われがちだが、危険を回避するための装備を揃えたうえで活動できれば、よりよい活動が出来ると思う。

この災害により、小高区の住宅被害は全3,771世帯中、全壊317世帯、大規模半壊33世帯、半壊65世帯、床下浸水48世帯にも及んだ。

## 多くの人に助けられながら気概を持って

私は今回多くの関係者の方に助けられたことを感じている。この地震、津波を受け、海に面した我々の地域は、津波に対する意識がもっと必要ではないだろうかと思う。一旦避難しても、「大丈夫だ」と言って戻ってしまい、津波にあわれて亡くなった方も少なくない。また、道路の作りも、山の方へ逃げる道が少なく、海岸と並行に走っているため、波から逃げ切れず、車ごと津波に飲まれた方もいた。今回のような未曾有の災害をいつまでも忘れず、心に戒めることが肝要である。

私は自衛隊出身で災害派遣も何度も経験した。人一倍責任を強く感じ気概をもって消防団の職務に従事している。それが自分の誇りである。そして、私は今も南相馬の地で、放射線量計ガイガーカウンターを片手に持ちながら、消防団活動にあっている。



# あの日から一歩も他には 行かないと決心した

福島県南相馬市消防団  
原町区団 副団長

**山見 重信** (62歳)  
消防団歴 27年 (会社役員)



## 南相馬市原町区の概要

福島県南相馬市の原町区はその南相馬市中央に位置し、面積は198.49km<sup>2</sup>、人口4万7,050人（平成23年6月1日現在）で、南相馬市の玄関口として位置し、市役所も置かれている地域である。また、国の重要無形民俗文化財に指定されている相馬野馬追も、原町区にある雲雀ヶ原祭場をメイン会場で行われている。

## 外の風景は一変していた

福島県南相馬市は震災や津波だけではなく原発事故という、まさに二重苦三重苦に苦しむ町だった。私は、あの日から一歩も他には行かないと決



南相馬市内の被災状況

心した。

震災の当日も普段通りに、地元のコンクリート二次製品製造会社で働いていた。14時46分に大きな揺れが東北を襲った。

その揺れは、立てかけていた鉄筋の素材を倒し、人が立っていることがやっという揺れだった。私はすぐにブレーカーを落としに行き、仲間と材料などが倒れないように押さえていたが、あまりにも長い揺れだったため、「これはかなりヤバイ」と思い仲間と共に外へ出た。揺れは5、6分でおさまったが、外の風景は一変していた。ピラミッド型に積んであった製品が崩れ落ち、会社の出入口が塞がれた状態で製品が散乱したひどい状況だった。

揺れがおさまらずに家族のことが心配になり、連絡を取ろうと携帯電話を手を取ったが不通となっていた。余震の続くなか、出入り口に散乱している瓦礫をリフトでどかして取り除き、出口をなんとか確保した。社長の判断でその日は家に戻ろうということになり、私は車で自宅に向かった。南相馬市ではこの時、真ん中にある原町区の本町と三島町で震度5弱を観測した。

私の自宅は福島第一原子力発電所より20km圏区域のすぐ近くで、今も家の目の前には警戒区域を示す「立ち入り禁止区域」のバリケードがある。震災当日、周りの道路の状況を確認しながら旧国道を南に向った。途中の風景を見て「あの揺れにしては被害がそれ程でもない」とその時は思っ

いた。自宅に戻ると家の入口脇にある土蔵が崩れていたが、自宅や家族は無事で安堵したのを覚えている。だが発災から約50分、自分が家に着いたその頃、津波の第1波が南相馬市の海辺を襲っていた。家で被害状況を確認していた時、防災行政無線により初めて津波が襲来していることを知った。私はすぐに消防団の半被を身に付け、被害にあっている現場に向かうことにした。



かつての住宅街の被災状況

## 水没した町で必至の救助

原町区の南警察署の先、上洪佐という場所はすでに津波の被害で水没しており、進入禁止となっていた。その進入禁止のすぐ先には、息子の嫁さんの実家があった。私が実家に駆け付けた時、目の前に見えるその実家は1階部分に津波による水没した跡があり、かろうじて建っている状態だった。

私はなにか嫌な胸騒ぎに苛まれた。行く手を阻むかのように電柱や木がなぎ倒され、水没していた。だが感じる嫌な胸騒ぎに押され、いてもたってもいられなくなり、その家に向かった。消防士が「山見副団長！ それ以上は入っちゃダメだよ！ 危ないから！」の呼びかけがあったが躊躇せず、腰まである水位のなかを進んで行った。家に近づくにつれ、自分の胸騒ぎは益々膨らんでいき、「実家にまだ人がいるのではないか」「確認しなければ…」と思った。瓦礫が行く手を遮ったが、かろうじて人が通れるスペースがあり、私はなんとかその家に着いた。倒れかけて低くなっている1階の屋根から2階に上がり、大声で「誰かいんのかっ！」「山見だっ！」と叫んだ。

ふと辺りを見ると他の家の屋根に嫁さんのお母さんとおばあさんが寄り添っているのが見えた。急いでその屋根に向かうとおばあさんは意識朦朧とし、震えている状態だった。おばあさんは、津波がきた際に車で逃げようとし、車ごと流されてしまったが、運よく車を見つけたお母さんに助け出され、屋根の上に避難したのだという。屋根に

登ってくると、お母さんが「山見のお父さんがきてくれたよ！」と、おばあちゃんに声をかけた。自分の半被をおばあちゃんにかけて「大丈夫だから！ 大丈夫だから！」と何回も声をかけ、消防士に向かい、大きな声で「2人いたよ」と安否を知らせた。すぐに消防士たちが担架を持ってきた。私は2人を乗せた救急車を見送った。

その後、私は家に戻って、お嫁さんに家族の状況を報告した。その足で市役所に設置された災害対策本部に合流した。発災当日11日の段階で、団員はかろうじて4名集まった。災害が起きたばかりで家族や家のことで混乱を極めており、消防団の招集は翌朝にすることになった。

## 90名以上の団員が戻ってきた

翌12日朝、福島第一原子力発電所で原発事故が発生した。私は朝から警察や消防と捜索の打ち合わせをするため市役所にいた。南相馬市内は通信網がまだ遮断されている所もあり、団員の召集も難しく、連絡をどう取るかなども話し合われた。一方、各団員も震災や津波で被害にあい混乱していたものの家族の安否確認や被害確認を行ったのち、消防団員としての責務を果たすため、連絡できる団員は状況報告として市役所に連絡を入れていた。

南相馬市では原子力発電所の事故により、内閣総理大臣から市の南部地区（主として小高区、原子力発電所から20km以内）に避難指示が発令され



上渋沢の実家付近の被災状況

た。南相馬市では小高区全体がその半径20km圏内にかかり、小高区だけでも約9,600人が県外へ避難した（平成23年7月現在）原町区の私の所は、かろうじて避難区域にかからなかったものの原子力発電所事故の影響がないということではなかった。自分の息子夫婦は、子どもが小さいということもあり一時市外へと避難した。

15日には「屋内退避勧告」が出され、捜索にも影響が出て、困難を極めた。団長は屋内退避勧告が出た以上、団員たちに強制で「団員を集め、捜索せよ」とは言えず、団員たちの安全も考慮しなければならなくなり、やむをえず捜索を断念することを判断した。

しかし、団長の思いとは裏腹に各団員たちはこの非常時に責務を果たしたいという思いで集まり始めた。1人増え、2人増えというように徐々に集まり、最終的には90名以上の団員が戻ってきた。団員たちの気概が本当に嬉しかったし、感謝したい気持ちで一杯だった。私や団長はその団員たちの思いに応えるべく、団員たちに出来るだけ安全を確保しながら捜索してほしいという思いで事務局にマスクや作業着、捜索道具などの用意をお願いした。福島県消防協会もすぐに対応し、作業着や捜索用具などを支給してくれた。なかには震災で家や洋服なども失った団員たちもいたが、彼らも支給された作業着を着ながら、捜索に従事してくれた。

## 無念さに涙があふれ出た

本格的に始まった捜索や遺体捜索の作業のなか、私は遺体安置所で活動することになった。警察官の立ち合いのなか、ご遺体を引き継ぐ場合は、「何時」「何処で（詳しい場所）」「誰が発見して」「状況」などを記載することになっており、全国から集まっている警察官では詳しい地名などは分からず、地元の人間のほうがスムーズに引き継げるので、その任務に自ら付き陣頭指揮にあたった。

私はご遺体の無念さに心を痛めながらも、せめてご遺体を安置する前に、「汚れた体をきれいにしたい」という思いから、ご遺体の無念を振り払うかのように丁寧に洗う仕事を来る日も来る日も続けた。日が経つにつれて1日10体も20体も上がってくるご遺体で、作業が追い付かなくなった時もあった。私は学校のプールの水をポンプで吸い上げ大量の水を確保。ご遺体がこれ以上傷つかないようにとホースからの水流を噴霧状にして丁寧に洗い、着ていた衣類も洗ってから袋に入れ、ご遺体と一緒に安置をした。こうして私は3月いっぱい284体のご遺体を送った。

なかには災害の惨さを物語るご遺体もあり、若い団員にはなるべくそのようなご遺体を見せず、自分が行った。また時には、小さな子供のご遺体上がることもあった。その子はまだ幼く生まれた時のように腕と足を曲げ、その眠ったような安らかな姿を見た時はその子の無念さに自然と涙があふれ出た。

他の現場でもご遺体が上がりはじめ、私はその地区の消防団にご遺体の取扱などの指導を行った。

## 何よりのご馳走、身も心も温まった

4月に入ると私は、捜索で指揮をとった。消防・警察・自衛隊・消防団の合同で捜索隊の分団を作り、必ず各分団には土地勘のある詳しい人間



が入り捜索をすることとなった。団員たちにはまず「自分たちの身は自分たちでしっかり守る」を合言葉にマスク、手袋、軍手などを揃え二次災害がでないように徹底し、捜索に臨むよう伝えた。南相馬市の当時の捜索現状は、原子力発電所の事故の影響で、行動制限が出てしまったが、団員たちは「少しでも早くご遺体をご家族の元へ」という気持ちで懸命に捜索を行った。南相馬市消防団は消防団波の無線の数が充実しており、各分団が状況を常に把握できることができ捜索においても十分力を発揮した。

また南相馬市では原子力発電所事故の風評被害も激しく、流通が遮断され物資が届かなくなっていた。捜索にあって食事もなく摂れない状況がつづいた。しかし、誰ひとり文句を言う者もなく捜索を行っていた。時には温かいお茶を喉に通すだけの時もあった。

そのような状況のなかで、炊き出しによる熱いカレーライスが出された時の団員の笑顔、それを食べて「何よりのご馳走」と思ったことは、今でも忘れられない。その一杯で身も心も温まり、活動への意欲を取りかえした。

## 水の流れを把握して、防災に役立てる

今回の津波で、南相馬市消防団では死者8名、行方不明者1名という尊い犠牲がでている。殉職者のなかには、消防車で市民へ津波の避難広報を呼びかけている最中に、波にのまれた団員もい



海岸付近の様子



地形によって海水の流れは予測できる

る。東日本大震災という未曾有の大災害は色々な教訓を残した。

海辺の町に住む住民の方々を襲った津波は、「まさかそんな大きな津波がくるとは」という考えにより引き起こされたのではないだろうか。また、津波で起こる海水の流れを地形の分析から予測することも不可能ではなく、水の流れを把握すればそれを今後の防災に役立てることもできるのではないかと、私は思う。今回の津波は白い波ではなく、瓦礫を含んだ黒い泥水の波として襲ってきた。多くの犠牲者は、この黒い津波で命を失った。

## 復興に向けて前向きにここに残る

南相馬市には今もまだ避難をしている地域が多く空家が多いため、消防団は毎晩交替で巡回を行い防犯に尽くしている。消防団の基本的役割とは、消火活動、鎮火後の現場残務処理など、常備消防のサポートであると思っているが、最近は地域に密着した存在として犯罪を未然に防ぐ自警団の役割もかなり多くなっているといえる。

若い方は将来があるので原発事故後は心配で避難されてる方も多いが、私たち夫婦はあの震災以降、ここに残ることを決めた。復興に向けて前向きな姿勢で半歩でもいいから前進したいと思う。

# 津波への警戒心薄かった 地域住民

福島県いわき市消防団  
第2支団第1分団 庶務部長

**吉田 一弥** (52歳)  
消防団歴 11年 (会社経営)



## いわき市の概要と被災状況

いわき市は、福島県の南東端、茨城県と境を接する、広大な面積を持つまちで、東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域である。人口は、33万2,686人（平成24年3月1日現在）と東北地方では仙台市に次ぐ人口を擁している。面積は1,231.35km<sup>2</sup>で、約60kmに及ぶ海岸線に点在する海水浴場や日本三古泉の一つに数えられる「いわき湯本温泉郷」を中心とした観光サービス業などを展開している。

いわき市消防団は、7支団47分団327班3,744名（平成23年4月1日現在）で構成されている。第2支団は、407名、消防ポンプ自動車5台、小型動力ポンプ積載車35台で構成され、市の北東部の位置する四倉・久ノ浜・大久地区を管轄としている。

いわき市全体では、東日本大震災による人的被害は死者310人、行方不明者37人、負傷者4人、住家被害は全壊7,710棟、半壊3万798棟となった。

## 3日続きの警報があだに

3月11日の大地震が起きた時、私は仕事の関係で小名浜港近くに出向いていた。これほどの揺れは起震車で体験しただけで、実際に経験したこと



中之作漁港（国土地理院）

のない激しい揺れだった。屋根瓦がバラバラと落ちたり塀が倒れたりする様子が目に入った。この辺りは震度6弱だった。

「すぐに戻らなければ」と、車を走らせていわき市中之作にある第1分団第4班の詰所にたどり着いた。途中、道路が陥没している箇所もあった。地震の被害はかなり大きいと感じた。詰所では仲間の団員が、すでにポンプ車を出動させる準備を整えていた。それを確かめると自宅に戻り、隣近所の十数戸に避難を呼びかけた。

「大きな余震が来るかもしれません。建物の中は危険なので、すぐに外へ。がけ崩れが起きそうな場所には近づかず、瓦が落ちてくる心配のない広い場所に逃げてください。津波が来るかもしれないから海にも近づかないように」

注意事項を細かく伝えると、再び詰所に戻った。自分も含め、8名の団員が勢ぞろいした。詰所の隣にある区民館にいた人が「テレビが大津波





江名郵便局周辺の浸水状況

警報の情報を流していた」と知らせてくれた。「急がなくて」と、私は団員のうち2名をポンプ車に同乗させて出動。中之作の港周辺を重点的に一回りして「大津波が来るから、すぐに避難してください」と、知らせて回った。倒れたブロック塀で一部が塞がれた道路もあった。詰所に待機させた5名の分団員も、それぞれに住民たちが円滑に避難できるように誘導していた。自分たちも詰所周辺に引き返して「海に近づかないように、高い所に逃げてください」と呼びかけながら、走行中の車の誘導に当たったが、受け手側に緊迫感が伝わらないことにはささか苛立ちを感じた。

中之作地区は海岸沿いの湾岸道路が緩やかな登り坂になっている市道につながり、その両側に住宅地が広がっている。その市道をみんな、ゆっくり歩いていた。自分たちの呼び掛けが決して大きさではないことを分かってもらいたくて、「命が惜しかったら、急いで走れ」と、大きな声で叫んだ。ただ、9日、10日にも地震があり、津波警報も出ていたが、海面にこれといった変化は観察されなかった。その時もポンプ車で津波の広報に回っており、住民たちの間には「またか」という思いがあったに違いない。

### 日没まで続けた津波監視

3月9日、10日の地震発生後に、私たちは警報を伝えて回った後、海の様子を注意深く見守った

が変化が見られず、2時間ほどで警戒態勢を自発的に解いた。警報解除の通知はどこからも伝わってこなかった。だから、解除の広報はしていなかった。そのことが住民たちの緊迫感を削ぐ一因になったのではないかと後になって反省した。

車道には、たまたまこの地区を通りかかった車も混じっている。そうした他地域の人たちをも混乱のないように誘導してやらなければならない。住宅地を縫って走る5本の登り坂道路ごとに団員を配置。混乱なく、避難者を誘導した。それぞれの道路には緊急の避難場所になるような空き地があり、そこにはそれぞれ20人～30人ずつが集まり、海の様子を見てカメラやビデオで撮影している人もいた。緊急避難した人の2割ほどは地元以外の人たちだった。

消防団員たちは手分けして避難場所に集まった人たちの保護に当たった。私は詰所の近くで津波の到達を監視した。第1波は港の岸壁に乗り上げたが、ひたひたと洗う程度だった。第2波は港湾道路を完全に乗り越えて6m～7m奥の市道のすぐ脇まで達していた。港湾道路と市道の高低差は約2m。その後に発生した第3波が最大で市道をも乗り越えた。さらに第4波、第5波が押し寄せたが、港湾道路が水浸しになるくらいで収まった。津波があと50cm高かったら、詰所も床下浸水の被害を受けるところだった。

市道をさらに上って行くと県道につながる。津波の心配はほぼなくなったと判断して、市道周辺に一時避難した人たちに海には決して近づかず県



浸水した沿岸部



道方向へ抜けるように促して避難場所からの移動を指示した。その後も万一に備えて、数人の消防団員が交代で暗くなるまで海の監視を続けた。

第1分団第4班の管内では、港湾道路と市道の間に建っていた50戸ほどが床上・床下の浸水被害に遭ったが、流失した建物はなかった。小名浜港界隈の地区のうち中之作は複数の防波堤のおかげで跳ね返った波同士がぶつかり合い、津波の直接の勢いを削いでくれた。しかし、隣接する永崎、折戸辺りの地域は津波に直撃されて大きな被害が出た。流失、損壊も含めて家屋の被害は7割に及んだ。残った3割も全くの無傷は少なく、床上・床下浸水の被害を受けている。

臨時の避難所にした区民館の瓦もかなり落ちていたので、消防団員たちが地区の役員とともにブルーシートを被せた。区民館近くの中山医院がデイサービスで預かっていた介護が必要な高齢者10人も看護師が付き添って区民館に避難してきた。区民館の避難者は全部で50人ほどになった。管轄区域内では、江名中学校と真福寺別院も避難所として指定されている。江名中学校の体育館には、怪我人もいて、中山医院が治療にあたってくれた。治療には照明も必要だろうと判断して、区民館に保管してあった発電機を体育館に運び込んだ。発電機は、照明とともに暖房用にも利用してもらった。真福寺別院にも20人ほどが避難していたので、暖房機を届けた。

## 原発事故の影に泣く漁港

消防団員は、交代で一時帰宅しながらも、明け方まで全員が緊急事態に備えて待機の態勢をとり続けた。3月12日になって、新たな恐怖が生じた。東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故である。どう対応するかを消防本部と相談した。安全が確認できるまでは、とりあえず福島第一原発から少しでも遠くへ離れることが最善策だということになった。事情が許す限り、いわき市よりも南か西の方角のできるだけ遠くへ退避するように呼

びかけた。とくに放射線の影響を受けやすい子どもがいる家族は避難するように説得した。それに応じて8割ほどの住民が一時的に地元を離れた。

見えない不安に脅えながらも次の日には帰宅した人、1週間後、1か月後に帰宅した人といった具合で退避後の行動はそれぞれだったが、7月末までに全家族が自宅に戻っている。しかし、消防団が発した自主的退避勧告は間違っていなかったと確信している。

地元の中の作港はカツオ漁港として知られている。だが、大きな被害を受けなかったのに、原発事故の風評被害でほとんど水揚げのない状態が続いている。実際には小笠原とか房総沖で漁獲したものなのに、中之作港のカツオということで買い手がつかない。隣接する小名浜港でも同じ状況が続いている。理不尽な話である。中之作はウニの貝焼きも名物だが、これも利用者から敬遠されて、漁協関係者も平成23年中の営業再開を断念した。

津波で港内に沈んだ車両や瓦礫もすっかり撤去され、港としての機能は完全に回復しているのに、中之作港は開店休業状態になっている。

電気は早い段階で復旧し、各家庭の冷蔵庫にあった食品は無駄にせず利用できた。米の買い置きもある。干物や保存食もある。区域内には震災で破損した冷凍倉庫があり、中に貯蔵してあるかまぼこなどの食糧を利用してほしいと所有者から申し出があり、当面は食べ物に困ることはなかった。

## 生活用水探しに走り回る

しかし、生活水の確保では苦労した。この地域では大震災発生で断水後、どこからも全く給水のない事態が1週間も続いた。自宅は難を逃れたものの、実際には生活ができない状態だった。消防団員たちは地区の役員にも協力してもらい、井戸水や水道水が出ているところを周辺地域にまで範囲を広げて探し歩いた。各戸当たり1日5ℓほど



給水活動



被災した消防車

の水をなんとか分けてもらい、断水した家庭に配って回った。

その後、地元の浄水場で直接に取水できるという情報が入り、分団員たちが2t車に大きなポリタンクを積んで水くみに日参した。こうした事情を知った第2支団本部及び他の分団からも給水の応援が入り、生活水確保の闘いはひと一息つけた。市役所から給水してもらえるようになったのは、大地震発生から2、3週間ほど経ってからだった。

自衛隊の救援活動による給水は、あくまで避難所が対象である。自宅でなんとか生活できるような場合は、住民が自力で水を確保しなければならず、消防団が支援せざるをえなかった。それでも住民たちの水不足状態が解消されるまでには、しばらくの日時がかかった。そのうちに避難所が最優先だった自衛隊の給水活動にもゆとりが出てきて、スーパー前でも受け取れるようになり、水に対する不安が薄らいでいった。

この地域で断水した水道が復旧したのは4月10日、ちょうど1か月かかった。それも半分の地域だけ。翌日には全域で復旧するかなと期待していたら、4月11日に震度5の地震が発生。再び、断水になった。完全復旧は、それから1週間後となった。

## 地元住民を守るために

東日本大震災に絡んで、水の確保や原発事故後の対応など消防団活動のマニュアルには明記されていない状況にいくつも遭遇した。その都度、地元住民の生命・財産を守るという大前提に合わせて自主判断し行動した。

消防団として所有していた10台の消防車のうち4台は津波の被害で使えなくなり、その分だけ地元住民に対する支援活動や広報活動などが制限されたことは否めない。

自分が経営している非破壊検査会社も、受注の3割を占めていた原発所在区域からの仕事はゼロとなった。いわき市内の仕事もほとんどなくなり、今は従来の3割しか仕事量がなく、7割の従業員には辞めてもらっている。

いわき市消防団第2支団第1分団は、吉田伸分団長含めて総勢は16人。そのうち、自営業は4人、あとは会社勤めという、いわゆる都市型の消防団組織である。今回は、サラリーマン団員も大地震発生から1週間は勤務先の会社が臨時休業状態だったので、一番忙しい時期はほぼ全員が消防団活動に携わることができた。

# 震災後は救援物資の 配布作業に明け暮れた

福島県いわき市消防団  
第2支団第3分団 分団長 **石井 宮喜** (52歳)  
消防団歴 27年 (自営業)



## 指定避難所の対応に課題

3月11日の激しい揺れに襲われた時は、いわき市小名浜消防署の近くで開いている自分の生花店にいた。店内の花桶や花立てが倒れてむちゃくちゃになったが、それどころではなかった。外に飛び出し、店の横に止めてあった車につかまった。それでも、とても立ってはいられず、思わずしゃがみ込んだ。

これは、ただ事ではないぞ。そう思い、出勤していた4人の従業員には「海寄りの道路は絶対に通るな」と注意して、すぐに帰宅させた。その後、店からほど近い所にある自宅の様子を見に走った。あちこちで屋根瓦が落ちて道路に散乱していた。通行の障害になりそうな残骸だけは片付けてから、周辺の住民たちに急いで避難するよう、

声を限りに呼びかけて回った。停電にはならなかったのですが、テレビが報じる津波警報を頼りに、あわただしく動く住民たちの姿が確認できた。

消防団詰所に着いてみると、ポンプ車はすでに別の団員が運転して管内の巡回を開始していた。そこで、避難所に指定されている小名浜第二小学校の様子を確かめに向かった。初めのうちは校舎内に入れてもらえたのに、途中から「ここは一時避難所だから」という理由で校舎から締め出されてしまった。緊急時だからこそその避難所なのに、課題の残る対応だった。避難者たちは不安そうな表情で校庭に集まっていた。長期化する場合の避難所は、小名浜第一中学校だということを伝えると、避難者たちが一斉に小名浜中学校を目指して移動を始めた。そのため、中学校に通じる道路が車で大渋滞になってしまった。

私が小名浜第二小学校に着いた時はまだ校舎内



救援物資の積み込み



地域住民へ救援物資を届ける





港湾部の被害状況

に入れたので、3階まで上がり、津波の様子を監視した。視野に入る限りでは、自動車のタイヤが半分くらい水没する程度で収まっていた。津波警報が注意報に変わったことで、避難していた住民たちはそれぞれに自宅に戻り始めた。詰所に引き返すと、ポンプ車も戻っていた。大きな被害の報告は届いていなかったが、念のためにポンプ車で管内をもう一度巡回した。異常がないことを確認した後で、その日は警戒作業を解いた。3月12日も、ポンプ車で管内の状況把握のために巡回した。

### 市から「雨に注意」と通達

3月15日には、第2支団第1～第6分団の分団長会議が開かれた。地震直後に断水して住民たちが生活水の確保に困っていることが緊急課題になった。地元の浄水場から水をタンクに入れてそれぞれの管内に配って回ろう、ということになった。小回りの利く軽トラックに水のタンクを搭載して管内に届けることにした。そこで軽トラックの所有者に連絡して協力してもらった。ガソリンの搬入にも不安があったので、燃料消費が少ない軽トラックの活用は良い選択であったと思っている。断水は地域によって、1週間から1か月余り続いた。

自衛隊の給水車が比較的早くから活動を始めてくれたので、消防団による給水活動はそれほど長期には及ばなかった。しかし、震災後しばらくの



打ち上げられた漁船

間は物流が機能不全になり、商品が不足した商店は開店休業状態で住民の日常生活に支障が開始した。そのため、自衛隊が市の対策本部から小名浜消防署まで搬送してくれた食糧などの救援物資を避難所に届ける細かい作業を私たち消防団が請け負った。物資運びは、3月16日から4月26日までの40日間ほど続けた。その間の生花店の仕事は息子にすべて任せ放しだった。

物資の配布作業に当たっては、市から「雨に注意せよ」という通達があった。福島第一原発事故で放射能汚染が心配されるから、ということだった。空模様を見上げ、晴れ間を探しながら、車を運転した。雨雲を避けながらの作業で管内全域を回るのに、普段の倍以上の時間がかかった。といって、公平に配布しなければならないので、雨を全く避けるというわけにもいかなかった。住民から「ありがとうございます。明日も来ていただけるのですね」と、感謝と期待の声をかけられた。それを聞いたら、雨の日はやめようという気持ちにはなれなかった。

第3分団の管内では、住宅に対する津波の被害は少なかった。全壊した家屋もあったが、津波ではなく地震が原因だった。しかし、海岸沿いに建設された多くの工場や倉庫では、津波の被害が大きかった。それらの建築物や構造物が津波の勢いを削いで、結果的に住宅地への被害が食い止められたようだ。しかし、打ち上げられた小さな漁船が道路を塞いでいる箇所もあり驚いた。

# ポンプ車もろとも 濁流に揉まれて

福島県いわき市消防団  
第7支団 副支団長

**渡部 喜和** (63歳)  
消防団歴 40年 (木工業)



## じわじわ迫るどす黒い波

3月11日の大地震発生時、木工業を営む私は、建具を作っている最中だった。動くこともできないほどの激しい揺れだった。家族には「孫たちを連れて中学校へ逃げろ」と言い、管内の見回りと注意を呼びかける広報活動のために自宅脇の頓所に止めてあるポンプ車に向かった。

2日前の3月9日にも地震があり、津波注意報も出たが、この時は海面上昇もたいしたことなく鎮まっていた。だが、今度は違うぞ、と直感した。

激しい揺れはいったん止まったが、その後にしつこいくらいに揺れが長く続いた。近くの寺の門柱が2本倒れた。本堂も倒壊寸前のような揺れ方だった。

「大きな津波が来るぞ。早く逃げてくれ」

一人でポンプ車に乗り込むと、スピーカーから避難の呼びかけを繰り返し、流し続けた。運転席脇の窓は開けて、外の様子にも気を配った。JR常磐線の電車は止まり、踏切の遮断機は下りたままの状態になっていた。国道6号線は、すでに避難する車が数珠つなぎになっている。

管内への呼びかけ活動をひと通り終えて、屯所へ戻るために高台の江之綱地区から道路を下り始めたところで、前方にどす黒い波がじわじわと迫ってくる様子が視野に入った。最大規模の津波になった第2波だった。後で知ったのだが、第1波

は堤防を越えてはいなかった。

それから2分ほど経ただろうか。私は、ポンプ車ごと、荒れ狂う波に飲み込まれていた。窓を開けていたため、車内は水でいっぱいになった。あつという間の出来事だった。気がついた時は、ポンプ車の運転席の開けてあった窓から抜け出る水とともに勢いよく車外へ放り出されていた。

## 瓦礫の中から助け呼ぶ声

水中でもがくうちに、電柱に身体が引っ掛かった。無我夢中でその電柱にしがみつき、引き波が収まるのをじっとこらえた。この電柱は自宅前のものであった。見回すと、濁流は自宅の門柱をなぎ倒し、寺や墓地、街並みを根こそぎ飲み込むような勢いで押し進んでいた。住宅が、車が、何もかもが威圧するような濁流に押し流されていく。その中には炎を上げながら流れていく建物もあった。何かが発火して、火災が起きたらしい。

身内が濁流に引き込まれていくのを、ただ見ているしかなかった人もいた。襲いかかる津波の様子をビデオに収めている最中に、自分も巻き込まれた消防団員もいた。この消防団員は、しばらく流れに身を任せているうちに灌木の林に引っ掛かり、かろうじて助かった。その団員は海拔10mほどの土地に建っている自宅にいたのだが、もろに津波の直撃を受け、妹は犠牲になった。

引き波が収まるのを待って、私は電柱から降りた。日頃から身についた慣習で、まず出火場所へ、と気は焦る。だが、足元は瓦礫が折り重なって歩こうにも足の踏み場もない。瓦礫を乗り越えながら進むうちに、瓦礫に挟まった人影が見えた。近づいて助け出そうとしたが、すでに意識はなかった。引き出そうとしたら、すぐそばの倒壊した住居の中から助けを求める声が聞こえてきた。

消火活動よりも、遺体の収容よりも、まずは人命救助が先だ。そう決断すると、私は声のする方へ向かった。周辺で救助活動に動いている消防署員と消防団員が目に入った。その時は、遺体の扱いに立ち会ってほしい警察官の姿は、見当たらなかった。いわき市平消防署四倉分署長は、広報に駆けずり回っていた。

### ありったけの衣類をかき集めて

被災した人たちが、JR久ノ浜駅に集まっていた。血を流している人、ぐったりしている人、寒さで震えている人。駅員がストーブを焚いてくれた。しかし、夜になって何時ころだったか定かではなかったが、駅員が「駅舎を閉鎖するので出て行ってほしい」と伝えに来た。

規則であることがわかってはいるが、この非常時だ。「なんとかならないか、薄情だなあ」とは思いつつも、それ以上の無理強いはできない。仕方がないので避難者たちを説得し、久ノ浜中学校に移動してもらった。幸い、そこには医師もいて病人やけが人の手当てにあたってくれていた。

停電、断水で、避難所では水洗トイレは使えなくなった。我慢のできない年寄りや、ベランダで用を足していた。見て見ぬふりをするより仕方がなかった。夜はまだ寒さが厳しく、避難所に向かう年寄りには特に冷えないようにありったけの衣類をかき集めてもらって持参させた。

私は、避難誘導や救出活動に専念し、自分自身が津波をかぶってずぶぬれのまま活動を続けてい

たことさえ気づかなかった。消防団員たちは災害発生以来、何も食べず水も飲まずに活動を続けていた。すぐに手に入る食料は何もない。避難所に行ったら、何かあるかもしれない。といて、消防団員用にあらかじめ準備されたものがあるわけではない。乾パンがいくらか残っているのを譲ってもらって、消防団員たちで分け合った。だが、乾パンを呑み込む水もない。瓦礫の間に散乱していたペットボトルのうち、容器が壊れていないものを拾い集めて飲料にした。これだけで再び、行方不明者の捜索・救出、遺体の収容や消火といった活動に戻っていった。

### 貴重なおにぎり1個

やがて夜が明け、空が白み始めるころに、団員たちは空腹感を訴えた。私は、避難所の久ノ浜中学校へ向かい、炊き出しのおにぎりを団員たちのために分けてもらいたいと申し出た。1人1個ずつではあったが、団員たちの当座の飢えは凌げた。救援物資もまだ届かず、難を逃れた家々からコメを持ち寄って炊き出した貴重なおにぎりだった。ありがたかった。2階部分が残った自宅では、妻が避難生活に役立てられるものを避難所に運び込み、救援活動に協力した。

被災2日目の3月12日は、日が暮れるまで、握り飯1個で働き続けた。12日の夜に消防団活動を止めて、いったん解散した。その夜は、妻の親戚を頼って一泊し、入浴して久しぶりに体を温めた。

### 混乱に乗じた盗難事件も

翌朝、行動を共にした息子とともに自宅にとんぼ返りし、前日に発見しながら収容できていなかった2遺体を残した場所へ向かった。警察官が安置所に搬送してくれたことを確認して、ホッとした。

その後は、鎮火し切れていない火災の消火と、



瓦礫の撤去に集中した。散乱した瓦礫で市街地は爆撃を受けたようになっており、何をすることも作業の妨げになる。なんとか、人が動きやすい状態まで整理した。津波は、国道6号のところまで瓦礫を押し込んでいた。

すると今度は移動しやすくなった環境に乗じて、空き巣や盗難事件が横行するようになった。消防団活動に協力してくれる人たちがいる一方で、悪事を働く者がいることにもぶつけようのない憤りを感じた。私の家からも、壊れずに済んだ2階にあったテレビやゲーム機などをごっそり盗まれた。私の家ばかりではない。住居は流されずに済んだが、停電と断水で日常生活ができずに一時的に避難所暮らしをしている留守宅は、軒並み被害に遭っている。

## 日を追って増える犠牲者

3月13日にとりあえず、実家で一息つこうと連絡をした。しかし、実家のあるいわき市北部の郊外では地震・津波の被害に加えて、一部地域には福島第一原発事故の影響で自主避難指示が出ており、里帰りできないことがわかった。

3月14日以降は、行方不明者の捜索が中心になった。3月22日に4人、23日に7人、24、25日には2人ずつ、26日に3人、いずれも遺体で発見した。行方不明者の数は当初33人だったのが、日を追って増え、27日には43人に増えていた。

第7支団は消防団本部からの要請を受けて3月28日には原発事故による避難指示地域内で行方不明者の救出や捜索活動を応援した。管轄外の地域のうえに、放射能から身体を守る防護服を着用しての作業だったので緊張した。行方不明者2人を遺体で発見したが、このうち、1人は元消防団員だった。

3月29日からは再び、地元での活動に復帰した。力を注いだのは、盗難防止だった。第7支団では、自分たちのものも含めて6台のポンプ車が津波にさらわれた。しかたなく、隣接する消防団



消防団による避難指示地域内での捜索活動

から融通してもらった1台を運転して、管内を1名で巡回した。住み慣れた地元とはいえ、すっかり変わり果てて人影もない管内は不気味だった。護身用に座席の脇には木刀を用意した。住民たちの有志が自警団を結成して見回りに当たり始めた聞き、夜間の巡回を2日間でやめることにした。

建物が消えただけではない。地形も変わった。揺すぶられ、津波にかき回された地盤は沈下して波打ち際が大きく後退してしまったのだ。地震直後はポンプ車でいつものように走れた道路が、津波の後は瓦礫に塞がれて身動きが取れなくなった。津波の威力の凄まじさを思い知らされた。私の体感では、津波を見てから、2分ほどで巻き込まれたのだ。

津波が見えてから逃げたのでは遅いのだ、ということを経験として学んだ。多くの犠牲者が出たが、地震の発生があと1時間遅かったら、もっと悲惨な状況になったに違いない。児童生徒たちが下校途中に津波に巻き込まれる恐れが懸念されたからだ。今回は幼児も2人、犠牲になったが、いずれも幼稚園に通園する年齢にも達していなかった。

津波から逃れようと孫を軽乗用車に乗せた後、飼い犬のことが気になって家に戻ったところで津波に巻き込まれて犠牲になった祖母もいた。孫は軽自動車に乗ったまま津波に浮いて助かり、祖母は後になって焼け跡の中から遺体で見つかった。生と死の分かれ目は紙一重だということだ。

# 福島原発避難者を迎えて女性消防団の活躍

福島県田村市消防団  
常葉地区隊庶務分団女性部  
部長

**渡邊 清子** (55歳)  
消防団歴 20年 (農業)



福島県田村市消防団  
常葉地区隊庶務分団女性部  
班長

**三浦 真由美** (38歳)  
消防団歴 12年 (会社員)



## 福島県田村市の概要と被害状況

福島県田村市は、福島県の沿岸から約40km西、郡山市まで約30kmの阿武隈高原の中央に位置し、福島県の中通りにあって浜通りとの結節点となる地域である。気候は、年間の気温較差が大きく、降雨・降雪量は少ない表日本内陸山間型の特徴を持ち、寒候期においても、連続した降雪期間は短くなっている。面積は458.30km<sup>2</sup>で約62%を山林が占める典型的な中山間地域となっている。人口は約4万人である。

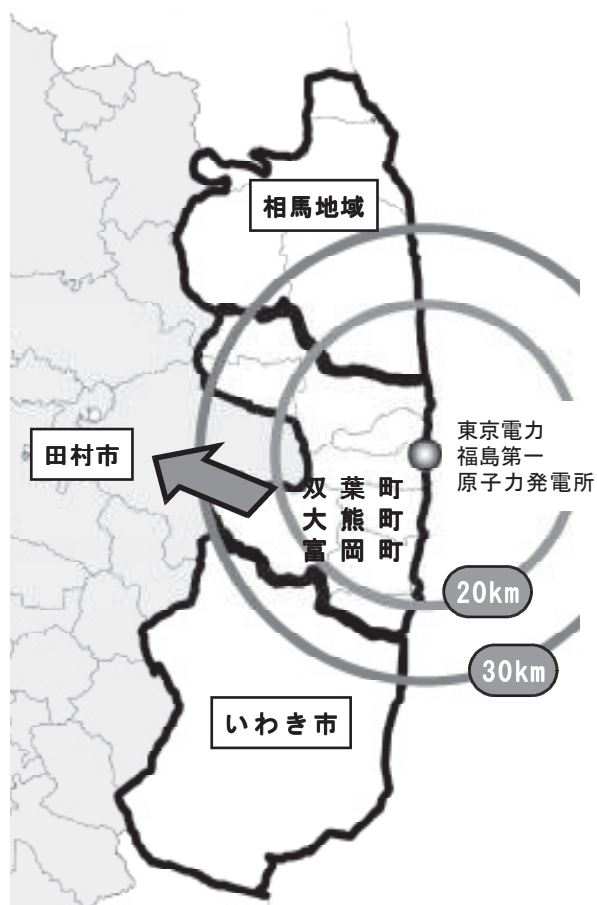
田村市消防団は、1本部5地区隊1,559名で構成される（平成21年4月1日現在）。なお、女性部を設けているのは大越地区隊と常葉地区隊のみである。田村市消防団常葉地区隊女性部は、平成4年に福島県で2番目の女性消防団「常葉町女性消防団員」として団員10名で発足した。平成15年には20名に増員され、平成17年3月の町村合併に伴い田村市消防団常葉地区隊女性部となった。

田村市では、3月11日の東日本大震災で震度6弱の揺れを観測した。住家被害は全壊14棟、半壊162棟となったが、死者は病院から避難する途上で亡くなった方1人、負傷者5人とどまった。田村市内1万2,000世帯で、1件の火災が起きたものの、直後に消火された。当日は地震が起きてから、各戸に付いている防災無線で呼びかけた。

田村市は、福島第一原発から西方へ約40km離れ

た所にあり、警戒区域や緊急時避難準備区域からはずれたが、震災翌日から、国や県の要請で原発避難者を受け入れることになった。田村市では、平成23年の予算で毛布と仮設トイレを買う予定だったが、購入する前に地震が発生し、乾パン300食くらいしか備蓄はなかった。

12日早朝、大熊町の3,000人の避難者の受け入れ要請があったが、ふたを開けてみると双葉町、



3つの町からの避難民を受け入れた田村市常葉町

富岡町、大熊町の住民等約6,000人を受け入れることになった。田村市では急遽10箇所以上の避難所を開設し、当初5,000人位を受け入れ、残りは三春町に行ってもらった。

県が大熊町住民の受入れに併せ、食事も準備したとのことだったが、12日の夜に大熊町分の食料や毛布などが、大きな避難所になった総合体育館に「大熊町分」と届けられたため、約1,200人を収容した総合体育館だけで3,000人分の物資を全部配分してしまい、全避難所に届けられなかった。田村市では、市職員や消防団等で避難所開設・運営を行い、炊き出しは社協を通して日本赤十字社に加入するボランティアである「赤十字奉仕団」に依頼した。

## 震災前の女性消防団の活動

田村市女性消防団が発足した当初、制服を着て広報だけをやるマスコットの存在だった。私は方向性を悩み、女性消防団の全国大会に毎回参加したりして、いろいろな意見を聞いた。その中で思い付いたのが、団員や被災者の小さな怪我の手当をする災害現場での被災者のケアだった。女性団員は地区隊長から要請があった時、その都度動く。今では何か起きた時は出動するものと思われるまでになった。

女性消防団は月2回の広報や、年に1回、独り暮らし老人訪問をやっている。秋の一斉放水訓練や避難所開設訓練にも参加している。田村市では地区ごとに自治会はあるが、災害の時は消防団を中心に動いている。

## 揺れの後、余震警戒を呼びかけ

地震が起きた時、私は娘の家にいた。携帯電話の緊急地震速報が鳴ると同時に地震が来た。自分は孫を抱えて外に出て、落ちてくる瓦に注意し、収まるまでしゃがみこんでいた。近くの家には

団員仲間と一緒に、「余震注意」を言って回った。本当に震度5くらいの大きな余震がひっきりなしで、もう日本が終わってしまうのではないか、と思った。

私は1時間後くらいに、娘の家から地震から車で自宅に戻った。自宅は、壁や車庫のコンクリにひびが入っていたが、地震の揺れが収まり、火災だけに気を付ければ、1日位はパニックになっても、それで終わりだと思っていた。常葉町では火事は起きなかった。時間帯が良かったと思うが、常日頃火災予防の呼びかけを団で行っているので、それが住民の頭にあって、功を奏したのではないかと思った。

当日は、町の中も静かだった。自宅周辺は何も自由なく、避難する必要がなかった。電気は止まらず、テレビで情報も得られた。断水しても井戸が多かったので水にも困らない。ガスは、プロパンガスを使用している。農家だから食べ物も不自由せず、保存食も1か月分くらいは冷凍庫にあり、スーパーも何軒か開いていて食事の心配もなかった。

16時頃息子が戻ってきて一緒にテレビを見たが、津波の映像だけは鳥肌が立った。この世の出来事ではないような気分だった。ガソリンだけは1日目から不足していたので、車で走らないようにして家にこもっていた。

常葉町は全部で3,000戸あり、震災時には各地区に10数人の団員が、ふたりで一戸ごと回った。うちの地区は47戸で、第一に独り暮らしの家を回る。他にも周りの地域の確認に回って、それはほぼ毎日やっていた。当日は、男性団員のみの活動で、女性団員は翌日から活動した。

国道288号線だけが生きていて、2日目の朝から、浜通り方面からの避難者の車で混雑していたようだ。後で聞くと、この地区からも海沿いにいた人がいて、本当に危機一髪で辛うじて津波から逃げたという人が何人かいた。うちの地区から浪江町に仕事に行っていて、命は助かったのに、ショックのせいか自殺してしまった方もいた。



## 突然来た避難所開設の招集令

翌12日の朝8時半頃、電話が通じないからと地区隊長が私の自宅に来てくれた。富岡町、大熊町の避難者で、田村市都路町での受入れが一杯になり、常葉町に避難して来るので、行政局に9時に集まり、田村市常葉体育館での受入れ準備をしてくれとのことだった。三浦班長も呼び出され、私も慌てて他の女性団員を呼びに行き、20名の女性消防団員のうち10名位が、9時頃に集まった。

打合わせをする間もなく、すぐに常盤体育館で、女性団員、男性団員、幹部団員、行政職員など50名ほどで、ゴザや備え付けの専用シートを敷いたり、受入れの準備をした。避難所開設訓練をやっていたので、どういう作業が必要か、ある程度イメージできていた。

来るはずの毛布を待っていたが、10時半くらいから避難民が先に来てしまった。バスが列を作って直接体育館に来るので、一度にドッと来た。体育館入口の受付で、家族やグループなどの代表者の名前と人数、住所、携帯などの連絡先を書いてもらった。避難者名簿の台紙は市が当日作った。

常葉体育館には、約600人が避難してきた。避難者は住民だけでなく、学校単位、会社単位の作業服のグループなどもいた。皆、前日からほとんど飲まず食わずで避難していたらしい。中には、欧州系の外人もいて、会社の人を通訳していた。

来た順に通路だけ空けて奥から詰めてもらうと、それぞれの地区やグループで居場所を決め、自然と真ん中に縦一本、横何本かの通路ができた。毛布が来ると、さらにそれぞれの寝るスペース分くらいが自然に広がった。避難してきた人達が、それぞれ配慮し合って、特に混乱などはなかった。

暖房器具も2個しかなくて寒かった。避難してきた中には乳飲み子がいて寒さが心配だった。緊急事態で市に指示を仰がなかったが、乳飲み子とその家族は絨毯がある保健センター、高齢者は和室があり多少暖かい公民館へ移ったらどうかと思



避難所となった田村市総合体育館（田村市提供）

い、体育館に避難者が落ち着いた後、見回って該当する人に声を掛けて移した。

## 常葉町民や団員が供出した支援物資

結局最終的に避難者用の毛布や食糧は来なかった。本当に寒かったので、16時くらいから、行政が防災行政無線で毛布などの支援を全町民に呼びかけた。すると、町民や商店などがすぐにたくさん毛布や支援物資を持って来てくれた。それを、女性団員が振り分けたが、振り分けが大変だった。公平性を配慮しつつ、持病のある人にはなるべく厚い布団など、特別な支援が必要な人にも配慮して、出来る限りのことをしてあげた。大量に持って行く人もいるが、遠慮深い人もいたので、後で体育館を巡回して不足している人に陰から毛布を足して回った。

水とお握りは、夕方17時か18時位に来た。少し残念だったのが、支援物資が来た時に、人数を把握してから配ると言っていたのに、配る前からロビーに避難者が並んでしまったことだった。一回解散してもらってから配り直した。玄関先に運んでしまったが、出来れば全体が見えないように舞台の裏に一旦置いてから配れば良かった。

市が13、14日に第2弾、第3弾の防災行政無線で衣類を呼びかけると、これもたくさん集まり、13日夕方に一式揃った。集まった衣類を、行政局の下で女性団員が男女・年齢別に仕分けした。一度に分けると收拾がつかなくなるので、1軒1軒

声がけして、小さい子のいる家族から来てもらい、次に、薄着の人に声をかけ、最後は、一斉に取りに来てもらった。赤ちゃんの分がないので、自宅から持ってきてあげた。

学校単位で避難した子どもを探しに来る母親等もいた。避難所同士のやりとりはある程度できていて、公民館でとりまとめ、各避難所に避難者名簿を貼り出し、それを見てもらうようにした。

## 消防団員の炊き出しも

常葉体育館内が落ち着いたのは12日に午後で、その間女性団員が見回った。乳飲み子のミルクがなかったが、行政も準備していなかったのもので、私が班長と12日14時頃、ショッピングセンターに自費で買いに行き、買占めが行われている中、ミルク5缶、お尻拭きとおむつを各5個ずつ買った。風邪をひいている子供がいたので、自宅から薬を持ってきたり、不足している物で補充できる物は個人で用意した。

避難者用の食糧は確保されたが、消防団員のご飯がなかった。自分と班長の2人で、16時頃、消防団員用に自宅で20升くらい炊き、2時間くらいかけてお握りを握った。作ったお握りは行政局に置いて、団員に限らず誰が食べてもいいようにした。団員が初めて食事できたのが19時くらいだった。この炊き出しを3日間くらいやった。

テレビの取材は大きい総合体育館に行って、ここには来なかった。テレビで見えていたら総合体育館に救援物資が届いたと放送していたので、あそこで止まってしまったのだな、と思った。

常葉では、住民や小学校などから持ってきた毛布で避難民1人に2～3枚渡せるくらい充実したので、最終的にはテレビで見た総合体育館よりも、逆に居心地がよくなったと思った。

避難民からは2日目くらいに歯ブラシが欲しいと要望があったが、食べ物の手配が先で、洗面器や歯ブラシなどはなかなか用意できなかった。無い物づくしで、割り箸も買おうとしても売って

なかった。食料品は冷凍庫にある物などを売ってくれたが、流通が停まっているので、日用品が売っておらず、行政に要望した。

自治会の行政区長さんから、避難民用の炊き出しをすると申し出があったが、市から指示がなく残念がっていた。この辺の農家で米はたくさんあるし、持ち回りで火災時の炊き出しをしているのだ。自治会の行政区長さんに頼めば容易にできたことなのに、残念だった。

## 自主運営された避難所を支援

3月15日くらいになると、避難所の人達が自分達で避難所の仕事をしてくれるようになった。自分達はボランティアのようになったが、行政局の人達は大変で、一週間は寝られず顔がやつれていた。初めの3日間は仮眠もとらず食事も避難者を優先していたようで、見ていて可哀相なくらいだった。

お風呂も、避難者は4日間くらい入れず、1週間後くらいから常葉荘などの協力で入れるようになった。商店街の小さな店はやっていたので助かった。避難者も買いに行っていたのかもしれない。テレビは、体育館のロビーに1台あり、そこで皆情報を得ていた。

初めの3日間位は、無我夢中だった。自分達も何もかも初めての経験だったので、今思い返すと、自分達が体育館に来る時、タオルや日用品、薬などを自宅から持って来れば、行政の人にいちいち聞くより、早かったと思った。常葉避難所では人がいなくなる1か月間くらいまで様子を見ていた。徐々に行く先が見つかった人が離れて行って人が少なくなると、公民館に移り、避難所が解消された。

## 福島原発からの放射能

福島原発の事故による放射能を気にする人もい



避難所となった田村市総合体育館（田村市提供）

る。避難者の中で、被ばくしているから、調べてほしいという人もいたので、船引の公民館に集まってもらって検査した。大熊町の人達は確かに被ばくしていた人もいたが、ここもあの頃の線量は高かった。4日目過ぎたころから線量を計りだした。しかし、あの時は、季節的に海側の風なのでここは大丈夫だろうと言っていた。それと、ここに大きな山があったので助かったと思う。

やはり世代によっても考えが違い、小学生のお母さんなどは不安に思う人も多いが、常葉小学校に通う子ども達の中では、引っ越しする人は少なかった。お母さん方もまだ冷静に見守っていて、静かな印象だ。30km圏内の近くに小学校もあるが、校庭の土の入れ替えをただけで、通学も歩いて普通に行っているし、外で遊び、この前運動会も開催した。

農家は、落ち葉を腐らす肥土が作れないので、買わなくてはならず、余分なお金がかかるのが本当に困る。また、商店街は、閉まっている店も多く、実際の被害もだが、風評被害が全体に影響している。

## 女性消防団が目指す方向

避難者から、文句は一つもなかった。ありがたいと皆から何度も言われた。赤いお揃いのジャンパーを着ていたので声がかかりやすかったようで、何かあれば行政よりも先に声をかけてくれた。女



常葉地区隊女性部（田村市消防団提供）

性なので生理用品なども聞きやすかったようだ。

今までの経験から感じたことは、火災などが起きた時、周りの人達は火のことに集中してしまっ、被災者のことまで注意が行かない。そのため、女性団員は、消火活動ができない分、被災者のケアをするようにし、その都度必要なものを考えてきた。地震の時も、避難所となった体育館に集まった時からが私達の出番。避難者だけでなく、消防団員のお世話から、いろいろ幅広く動いた。

これまでやってきた方向性は間違っていなかったと誇りを持っている。このような対応ができたのは、日頃の訓練のおかげだ。団員は全員、各地区でも訓練しているので、ある程度のことは対応できる。つくづく訓練の大切さを感じた。やっている意識が違う。自分が言わなくても、三浦班長をはじめ、みんな団員がやってくれる。

その後、避難所が解消して通常の状態に戻ったが、車も使えず、通常の広報活動ができず止まってしまう。女性消防団用に軽自動車欲しい。市全体で40名いる女性消防団を市の本部付にと言われたことがあったが、せっかく地域に密着しているので、地元の団員でいたいと言った。今後どうなるかはわからないが、できれば地元の団員でやって行きたい。



# 原発事故に伴う避難指示により 行方不明者の搜索できず

福島県双葉町消防団

団長 **高野 豊実** (55歳)

消防団歴 27年 (会社員)



※本活動報告は、「日本消防」2011年8月号より再掲載したものです。

平成23年3月11日、14時26分、これまで体験したことのない強い大きな揺れが長く続きました。私は仕事でいわき浪江線を走行中でありましたが、強い揺れで走行できず、そのまま停車し、揺れの収まるのを待っておりました。揺れの収まった時点で会社に戻り、直ちに帰路に着きましたが、いたるところで道路が陥没し、やっとの思いで自宅にたどり着くも、散々たる状況にしばし呆然とするばかりでありました。

私の家は、海岸線から6km程西にあり、津波の影響は全くありませんでしたが、海岸部には3つの集落がありますので、津波による被害がどうなっているのか心配で、自転車で自宅から役場対策本部まで向うも、道路がいたる所で陥没しており40分程の時間をかけてようやく辿り着くことができました。

直ちに、現場に向うも、中野、中浜地区の家屋

は、津波で全てが流失しており、海岸線から西側に約4km程まで、ガレキ等が押し寄せており、田畑が一面海のような状態となっておりました。

海岸部の住民はすでに避難しておりましたが、その他の地区の住民も、頻発する余震に備えて各地区の集会所に自主的に避難しておりました。

対策本部会議で、中野、中浜地区等で20名程の



前田地区跨線橋上地震被害



三ノ宮付近津波地震被害



新山地区地震被害



双葉海水浴場入口付近



消防・職員・警察による中野地区捜索

行方不明者がいるとの報告を受け、あらためて事の重大さを痛感いたしました。避難中の町民への炊き出しを婦人消防隊、社会福祉協議会の応援を受けて行いました。

午後8時50分、原子力発電所の事故により、半径3 kmに避難指示が出され、翌朝には10 km圏内の避難指示が出されました。このことから、防災行政無線による広報とともに各地区消防団による地区内の巡回、避難広報を行ったところですが、避難バスが思うように確保できず、又、道路の陥没等により、各地区へのバスの輸送が困難と判断し、マイカーの相乗りにより川俣町への避難を防災行政無線により呼びかけをいたしました。結果として、国道114号線、288号線を利用したの避難となり、福島市、川俣町、田村市、三春町、郡山市等に分散しての避難となってしまいました。

その後、埼玉県加須市と二次避難先のホテルリステル猪苗代に移動し、現在に至っております。

地震、津波による被害も甚大で、20名程の行方不明者がいたにもかかわらず、何もできないまま避難しなければならず、消防団としての使命を果たすことができなかつたことが非常に残念でなりません。

しかしながら、消防団員からは一人の犠牲者も出なかつたことが幸いでありました。

今回の地震、津波そして原子力災害という最悪の事態に遭遇し、改めて危機管理の重要性を認識した次第であります。

現在、双葉郡8町村は、それぞれ避難生活を送っております。すべての町民が一日も早く町に戻り生活できることを心より望みながら、厳しい避難生活に耐え頑張っております。

最後に、今回の災害で避難所を提供していただきました、県内各地の皆様をはじめ、ご支援、激励をいただきました全国の皆様に、大変失礼ではありますがこの誌上をお借りし、心より御礼申し上げます。



前田地区地震被害



三ノ宮付近津波地震被害



# 分散避難した住民を 支援・搜索活動できず

福島県大熊町消防団

団長 **吉田 稔** (63歳)

消防団歴 43年 (農業)



※本活動報告は、「日本消防」2011年6月号より再掲載したものです。

平成23年3月9日・10日と2日連続で地震が発生し、津波注意報が発令され警戒にあたる。今思うと大地震の前ぶれだった。

そして、3月11日(金)14時46分、私は仕事で原子力発電所4号機で作業中だった。これまで、体験したことのない強い揺れが長く続き、しばらくの間、身動きも出来ず、近くの柱に寄り添い地震が収まるのを待った。地震が収まる少し前に建屋内は全灯停電になり、非常灯を頼りに出口へと向かった。建屋内は、激しい揺れを物語るように設備が揺すられて、舞い上がったほこりで遠くがかすんでいた。多くの作業員が一斉に出口付近に集中し大混乱となり、誰からとなく「津波が来るぞ、早くしろ。」の聲が飛び交った。

私は、退出するのが早い方だったので、歩いて15分程の高台にある会社の事務所に向かった。私が事務所へ着いたときは、既に1000人以上の人々で事務所の周辺は混雑していた。会社で仲間全員の無事を確認し、帰路についた。

大熊町は南北に約5kmの海岸線を有し、発電所は町の北端にある。私の家は、発電所より南へ4



熊川公民館

kmほどの海岸近くにあり、津波の被害が心配で「一刻も早く現場に行かなければ」と焦る気持ちで車を走らせたが、発電所構内から出る車が正門に殺到し、構内から出るのに1時間以上もかかってしまった。大熊町の海岸線は北から夫沢・小入野・熊川地区があり、私が夫沢地区に到着した時は既に津波が到達した後であった。その後、小入野地区を確認し、自宅がある熊川地区へと向かった。自宅周辺の家屋は津波で流失し、一面広い海のようにになっていた。

地元消防団と区長より警戒中の避難状態の報告を受け、その後、対策本部がある役場へ向い、担当者へ状況を報告した。

6号国道から東側住民に対し、体育館への避難



熊川字久麻川地区



奥熊川消防屯所





浜街道交差点

広報を開始すると共に、町内の道路状況を確認し、交通規制・バリケードの設置等を行い役場へ戻った。町内は地震発生と同時に全停電となり、電話も通じず情報伝達が容易ではなかった。

対策本部で、翌日の対応の打合せ後、津波で避難中の町民700～800名への炊き出しの準備を夜中より始めた。

12日の夜明け前に原子力災害の通報が入り、3km以内の避難指示が、10km以内の避難指示へと変わった。

このことから、急遽炊き出しを中止し、防災無線による広報と各地区消防団による地区内巡回・避難広報を行うと共に、避難バスの誘導・避難住民のバスへの誘導等を開始したが、ほぼ全ての町民の避難を終えたのは、12日の14時を過ぎていた。

町民は、田村市・三春町・郡山市・滝根町・小野町へと分散しての避難となったことから、消防団は田村市総合体育館に本部を設置し、団員は各避難所での警備・救護物資の荷受け・員数確認と分配・食事の世話等を3月12日から4月4日まで行った。その後、避難者は、二次避難先である会津若松市周辺の旅館・ホテルに移り、現在に至っている。

3月11日の地震津波による流出家屋約50戸、行方不明者も十数人おり捜索活動がこれからという時に何も出来ないまま、町民全員が避難者となり



小入野字東平弛内



県栽培漁業センター

消防団員として残念でならない。

ただ、不幸中の幸いは、消防団員に1人の殉職者もいなかったことである。

今回の津波被害を受けた地区の消防屯所は、地震津波災害に備え高台へ移設し、本年2月13日に落成式を終えたばかりで、消防屯所・消防車両の被害はまぬかれた。

これまで、毎年、原子力防災訓練を実施してきたが、今回の原子力災害では、国・県・電力からの情報伝達等の欠落が目立った。

防災訓練等でも、常に最悪の状態を想定し実施しておかなければならない。

人生には、「上り坂・下り坂、そしてまさか」と言う坂もあると言う。

そのまさかの時にも対応出来るよう、常日頃からの訓練に心がけて行く所存である。

現在、大熊町をはじめ福島県消防協会双葉支部に所属する8町村（広野町・楡葉町・富岡町・川内村・双葉町・浪江町・葛尾村）が避難生活となっています。1日も早く各町村に戻り、故郷の復興に従事出来る日が来ることを願っている。

終わりに、今回の災害で避難所を提供していただきました、県内各地の皆様はじめ様々ご支援をいただきました全国の皆様方に、誌上をお借りしまして心より御礼申し上げます。



小入野字東平弛内

## 消防団員総員で避難住民を支援

福島県富岡町消防団

団長

安藤 治 (61歳)

消防団歴 36年 (農業)



※本活動報告は、「日本消防」2011年7月号より再掲載したものです。

平成22年度中、私は消防団を対象とした地震津波災害に関する研修に2回参加した。(静岡県防災センター等・宮城県気仙沼消防本部等)

この時、研修で見聞きしてきたことと同様なことが半年後に自分たちの地域で起こるとは、誰一人として想像できなかったであろう。しかしながら、3月11日午後2時46分に現実のものとなった。

震災直後、町内至るところに生じた亀裂や陥没により道路網は寸断され、水道・電気のライフラインも止まり、通信手段すら失った。その様な中、消防団は約30分後に到達すると予想された津波に備え、全団出動をかけ警戒・避難誘導を行ったが、混乱から立て直す間もなく大津波が町を襲い、家や車を破壊しながら飲み込みこんでいった。その中には、人もいた。津波が運んだ瓦礫や恐怖は、救出に向かう我々の行く手を阻んだ。無念さと申し訳なさが団員の心を責めた。

さらに追い討ちをかけるように、東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故が発生した。原子力発電所の「安全神話」を信じていた者にとっては裏切られた思いとなった。

また、原発の「安全神話」はその後の事故対策にも影響を与えた様に思う。「安全神話」の上に立った東京電力(株)の企業体質も事故後の対応にも大きな影を落としているようにも思える。

一方住民は、プライバシーの無い避難所生活に身も心も疲れ果てている。

そして、未だ将来の見当も示されない状況の



海岸沿いの屯所に配備されていた可搬ポンプ積載車輛中、先々のことを考えることが出来ず、思考停止状態で暗い日々を送っている。

今回、活動状況報告の提出依頼を受けたが、暗い気持ちで筆が進まないでいる。よって、これまでの活動の記録を時系列的に控えたものを報告としたい。

3月11日(金)

14時46分 地震発生

15時00分 富岡町災害対策本部設置・消防団幹部召集

15時05分 消防団全団出動



3月11日深夜 電気水道がない中炊き出しを行う消防団員





遺体捜索を行っている消防署員

- 15時30分 大津波到達  
 16時19分 各分団より地域の現状報告を受ける  
 16時30分 ため池決壊を警戒し一部地区に避難指示  
 18時40分 婦人消防隊へ炊き出し要請（消防団もこれに加わる）  
 20時04分 地震・津波による町内避難所への避難者総数2,000～2,500人と報告入る  
 22時35分 福島第一・第二原発の状況により防災無線にて10km圏内屋内退避命令  
 22時47分 再度防災無線にて広報実施
- 3月12日(土)  
 5時45分 福島第一原発から10km圏内立入禁止  
 6時16分 町内各避難所から川内村、都路村へ避難開始  
 6時30分 消防団総員を災害対策本部に招集し、町職員と共に担当地区を指定  
 6時45分 避難場所を川内村とする  
 7時10分 各分団による担当地区での避難広報活動の実施  
 8時16分 改めて、避難場所を川内村とする  
 8時59分 東京電力(株)、国の指示によりベントする  
 14時36分 避難指示  
 15時36分 福島第一原子力発電所で水素爆発  
 17時30分頃 町民全員避難の報告を受け、町災害対策本部も川内村へ移動
- 3月16日～  
 川内村から郡山市にあるビッグパレットふくしまへ避難。  
 消防団は避難所の警備、物資の搬送等を行ない



3月16日 川内村よりビッグパレットに避難するのに合わせ物資を積み込む消防団員

ながら現在に至る。

今回の震災及び原子力災害を通し消防団活動を振り返った時、改善点は多々あったと思う。そのひとつに挙げられるのは、消防団として緊急で未経験な災害に対応するための知識の蓄積が足りなかった事により、一組織で解決出来るもの、出来ないものの区別が出来ていなかった点。これは組織運営者として反省をしている。今後は今回の反省点を生かし運営にあたりたい。

しかし、改善点が多いながらも、困難に直面した場合においても積極的に活動している若い団員の発想力の高さや広がりを見出したとき、将来への光を見つけた思いをしている。

富岡町消防団は、これまでの避難所支援活動から、郡山市・三春町・大玉村の仮設住宅へ移動された町民への防災対応に移ろうとしている。

先日は、三春町、葛尾村、富岡町、3町村の団長、副団長、担当課長、係の合同会議を開いた。また、大玉村との会議も予定されている。郡山市消防団とは地区隊の団員との交流も進んでいる。

我々を動かしているのは消防人としての使命感と応援や声をかけてくださる町民の皆さん、そして活動を支えていただいている町当局のご尽力が大であります。今は、避難所生活を一日でも早く終え、町へ戻り、団員そろって復興の礎としてお手伝いできることを願っています。

終わりに、今回の災害で避難所を提供していただいた行政の皆様、慰安や炊き出しに来てくださいましたボランティアの皆様、そのほか様々な温かいご支援をいただいた全国の皆様にも、誌上をお借りしまして心から御礼申し上げます。